

て仙台市中心部の公共施設で写真展を開催した。

・陽性者支援の基盤作り

東北の行政、医療・福祉関係者等を対象に、地方における陽性者支援を考える学習会を実施、「セクシュアリティと健康支援」「歯科医師はどのような支援が可能か」とテーマを設定し、教育機関や専門機関でのMSMに対する理解の促進をはかりつつ、議論を重ねた。

## 2-7. 行政との連携

「受検者本位のHIV検査についての交流研修会」を仙台市・宮城県と共催、仙台市HIV迅速検査会参加（広報協力、分担研究者のカウンセリング協力）、仙台市エイズ・性感染症対策推進協議会への参画、研究成果発表会「地方のコミュニティに根ざしたHIV感染対策の展開」を開催（主催：エイズ予防財団 共催：東北HIVコミュニケーションズ・NPO法人市民メディアイコール）、東北エイズ/HIV臨床カンファレンス（医療体制班）において活動報告、青森国際LGBT映画祭で活動を紹介、各機関への活動の紹介；福島県HIV対策推進協議会、宮城大学看護学部講義、日本エイズ学会サテライトシンポジウム「MSMを対象とした予防活動の一方法論としてのPOL（ポピュラー・オピニオン・リーダー）Grassroots Exchange Programからの報告」、仙台市エイズ・性感染症対策推進協議会への参画

## D. 考察

研究協力者の所属する東北HIVコミュニケーションズ（THC）は平成5年に活動を開始している。THCは当初からゲイサークルとのつながりがあり、彼らが関連するコミュニティに関心を持ち、平成16年にゲイのメンバーによるゲイのための予防啓発チームTHCGV「やろっこ」（仙台地方の方言で「男の子」の意）をTHC内のボランティアグループとして立ち上げ、仙台のゲイコミュニティに対す

る活動を開始していた。今回、仙台医療センターを含む3者によってMSM研究班東北グループを結成し、東北地方のMSMにおける感染予防啓発のため、HIV感染拡大阻止の研究体制の構築、啓発活動、ゲイコミュニティ及び関連機関との連携構築を行うため平成17年より研究を開始した。

東北地方は、ゲイコミュニティの規模が小さく、全体像が把握しづらい。また、増加傾向は看過できないが、感染者・患者報告数は他地域に比べると少なく、HIV問題に対する社会の関心は低い。こうした中小規模の地方に共通する状況の中で、効果的な予防対策を推進するために必要な諸条件を明らかにし、具体的な施策を提案していくため体制作りを行った（図1）。東北における拠点病院へのアンケートの解析等から東北地方においても性感染によるHIV感染者（特にMSMにおいて）の増加が顕著であり、早急な取り組みが必要と考えられた（図2）。諸医療機関においてはHIV感染症の認知度が低く、診断に遅れをとっているところが見られ、医療機関への啓蒙の充実を図ることも重要と思われた。

初年度（平成17年度）は以下のような東北地域のゲイコミュニティの特性と、研究を推進するために必要な条件が次のように浮き彫りにされた。

- ① ゲイコミュニティとの距離感
- ② 予防啓発、調査を実行する人材不足
- ③ マネージメント体制確立の困難さ
- ④ 地域の諸機関との連携の更なる強化

アンケート調査の結果を見る限り、HIV抗体検査受験率は横ばいで、啓発活動が即、ゲイコミュニティでの行動変容には結びついていない実態が明らかとなった。

3年間の活動では、ゲイ向け啓発チーム「THCGV やろっこ」のメンバー増員や、クラブオーガナイザーやバレー大会を企画するバーオーナーなど仙台のゲイコミュニティのキーパーソンとの協力関係強化をはかることが

できつつあり、地域の諸機関との連携も前進が見られている。東北のゲイコミュニティへの啓発を展開するための基盤作りは進みつつあるといえるが、現在のところ活動の成果が到達しているコミュニティはまだまだ小さいと思われる。

HIV 感染症は他の STI と密接な関係があり、医療者においては他の STD や免疫障害に起こる疾患の診断時には HIV 感染との関連性を考え、HIV のスクリーニング検査を勧め、早期診断を行なうことが重要である。HIV 感染者において、HIV 感染を診断された後に他の STD を発症したり、初診時から無治療で一次耐性 HIV が認められる患者もみられ、これは HIV 感染診断後にも行動変容がなされていない結果と考えられた。

平成 17 年から 3 年間で、抗体検査受検率は 15%弱という低い水準で留まったままである。しかし、受検しない理由は、特に回答のない漠然としたものから、時間が無いなど具体的な回答へと変化しており、感染の自己認識も、わずかではあるが可能性を感じて自分事として意識している人が増加している。行動のレベルでの変化はまだだが、研究活動により意識変化を促した可能性がある（図 4, 5, 6, 7）。

HIV に関するコミュニケーションについて調査した結果としては、対面で回答できるほど深いコミュニケーションがなされていない状況が推測された。これは、コミュニケーションの内容についての回答でも、友人と予防や検査の一般的な知識についての話はできるが、恋人やセックスの相手と具体的な行動につながる話までしている人は少数に留まっているという結果にも示されている。啓発のためのコミュニケーションスキルを高めるためプログラムを開発し、安定して活動を展開してゆくことが求められる。

本研究により仙台市、宮城県、岩手県、郡山市、福島県、秋田県など、東北の各自治体（行政）との連携の礎を築くことができた。

しかし、MSM 感染対策について、具体的な事業として動き出しているものがあるとは言えず、今後は一過性でない継続的な対策についての戦略を、共に策定してゆける場づくりが必要と考えられる。仙台市 HIV 性感染症対策推進協議会など、公の協議会に対する期待も大きかったが、実際には感染の拡大のスピードに即応できるような体制にはなっていない。各機関が連携した MSM 対策の体制構築を推進するに当たり、この領域で先行した取り組みを行ってきた当研究班がはたす役割は大きいものと考えられる。具体的戦略を共有した上で、各自自治体、各機関、当研究班が適切な役割分担を行い、共に課題解決に迎える道を模索する必要がある。

## E. 結語

東北のゲイコミュニティに対して予防啓発活動を開始し、3 年間でコミュニティのキーパーソンとの関係作りを進めることができた。コミュニティが小さく、支える人材も不足しがちな中、より状況に則した協力関係の構築が求められる。

## F. 発表論文等

研究論文

1. 佐藤功：宮城県でも感染拡大の HIV 感染症  
宮城県医師会報 716, 15-17, 2005
2. 田上恭子, 佐藤 功, 伊藤俊広, 菅原美花,  
鈴木智子：東北地方における HIV 感染者  
への心理的支援に関する研究～HIV カウ  
ンセリングにおける情報提供に着目して  
～弘前大学教育学部記要 94, 117-123,  
2005
3. 片倉道夫, 佐藤 功, 伊藤俊広：HIV 感染  
症に合併するトキソプラズマ症の実態調  
査, エイズに合併する寄生虫症, 発行：フ  
リーズ社 15-17, 2005
4. 佐藤功：東北ブロックにおける HIV 感染の  
現状と仙台医療センターの取り組み, AIDS

- Report.No72, 4, 2006 (口頭発表)
5. 佐藤功：東北地方における同性間の HIV/STI 感染予防啓発の普及促進に関する研究、男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究 (平成 18 年度総括・分担研究報告書), 厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究事業, 31-40, 2007
  6. Itoh T. et al.:Performance and quality assurance of genotypic drug resistance testing for human immunodeficiency virus type 1 in japan, Jpn. J. Infect. Dis, 60, 113-117, 2007
  7. 伊藤俊広：日本における HIV-1 遺伝子型薬剤耐性検査のコントロールサーベイ, 日本エイズ学会誌 9, 136-140, 2007
  - ける男性同性間の HIV/STI 感染予防啓発の普及促進～ゲイ CBO「THCGV やろっこ」の活動展開. 日本エイズ学会, 2006 年, 東京
  8. 小浜耕治:地方のゲイコミュニティで必要なこと～仙台地域での取り組み～「MSM を対象とした予防活動の一方法論としての POL (ポピュラー・オピニオン・リーダー) Grassroots Exchange Program からの報告」, 日本エイズ学会サテライトシンポジウム, 2007 年, 広島

#### 国内学会発表

1. 鈴木博義、伊藤俊広、他：病理組織診断に苦慮している脳病変をもつ AIDS の 1 例, 第 12 回東北神経病理研究会, 2005 年 10 月 15 日, 福島
2. 伊藤俊広:東北地方における HIV 感染の現状, 第 16 回日本エイズ教育学会, 2005 年 10 月 16 日, 仙台市
3. 小住好子, 伊藤俊広, 佐藤 功, 菅原美花, 他:HIV 専門外来における薬剤師の関わり, 第 43 回東北地区国立病院機構薬学研究会, 2005 年 11 月 26 日, 仙台
4. 伊藤俊広, 佐藤功：当院の性感染性 HIV/AIDS 患者における STD の実際, 第 19 回日本エイズ学会, 2005 年, 12 月 1 日, 熊本
5. 宇佐美修, 佐藤功, 他：東北地方の HIV 感染者の臨床症状とウィルス特性, 第 19 回日本エイズ学会, 2005 年 12 月 1 日, 熊本
6. 伊藤俊広, 佐藤功, 鈴木博義:当施設における HIV 感染症と中枢神経系合併症, 日本エイズ学会, 2006 年, 東京
7. 太田貴, 佐藤功, 小浜耕治:東北地方にお

図1. 東北地方におけるMSM研究班、ゲイコミュニティ、行政などの位置づけ

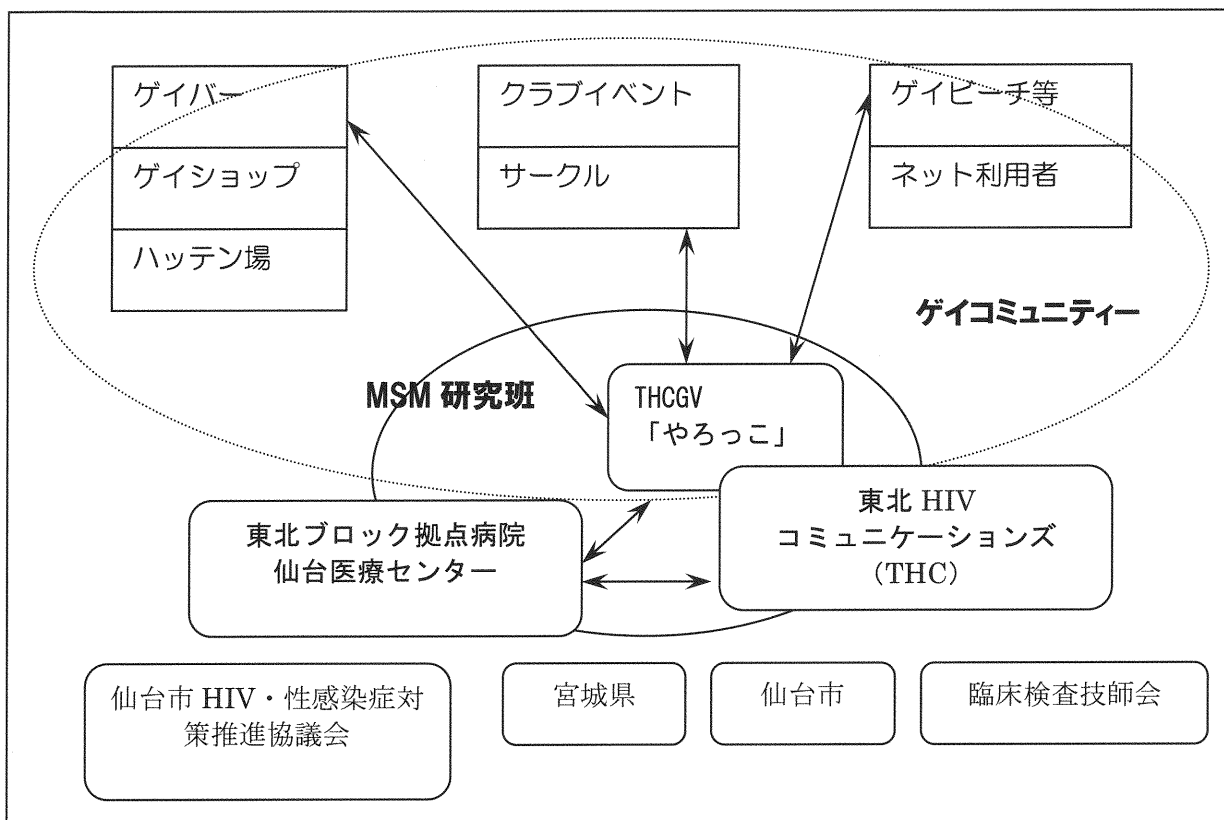


図2. 仙台医療センター新規HIV/AIDS患者の年次推移(感染経路別)

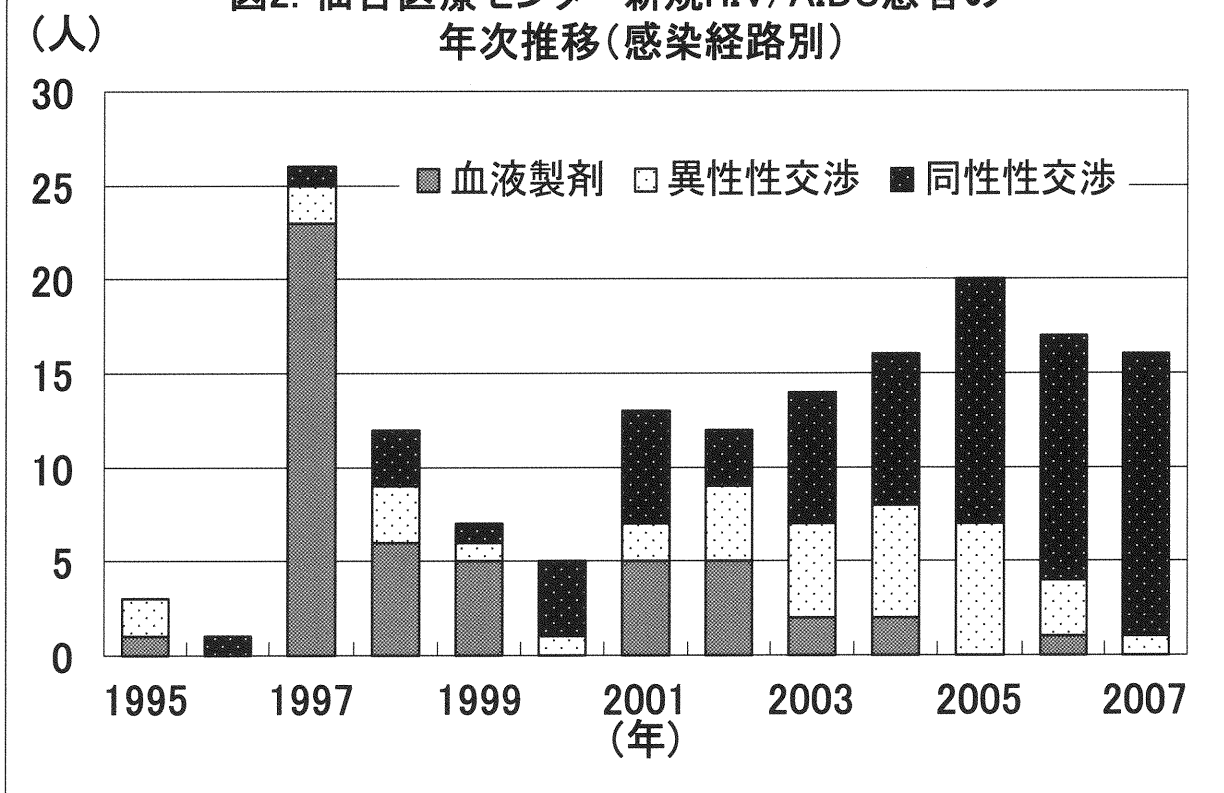


図3. HIV/STI の重複感染の人数

～2007年8月末～

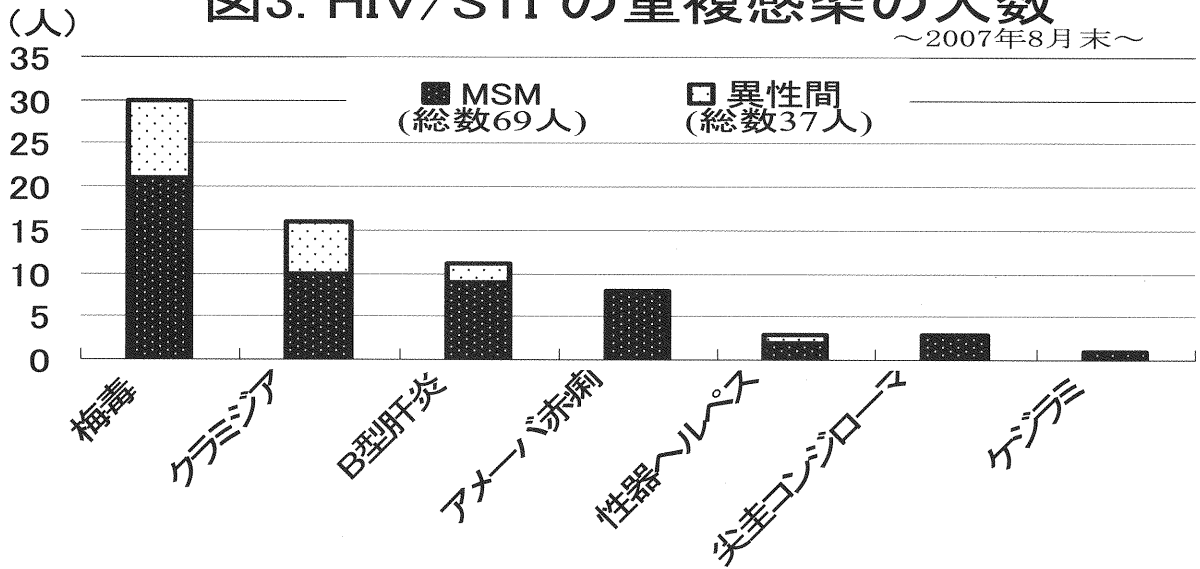


図4. HIV抗体検査の受検経験

■ 半年 ■ 1年以内 ■ 1年以上 □ 経験なし ■ 不明

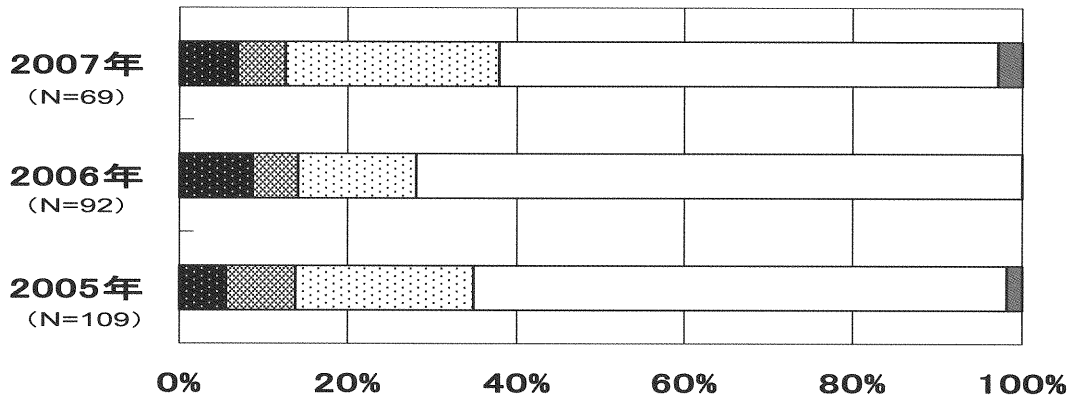


図5. 検査を受けない理由

■ 感染していない ■ 時間がない ■ 検査場所を知らない  
□ 怖い ■ 面倒 □ その他  
▨ 無回答

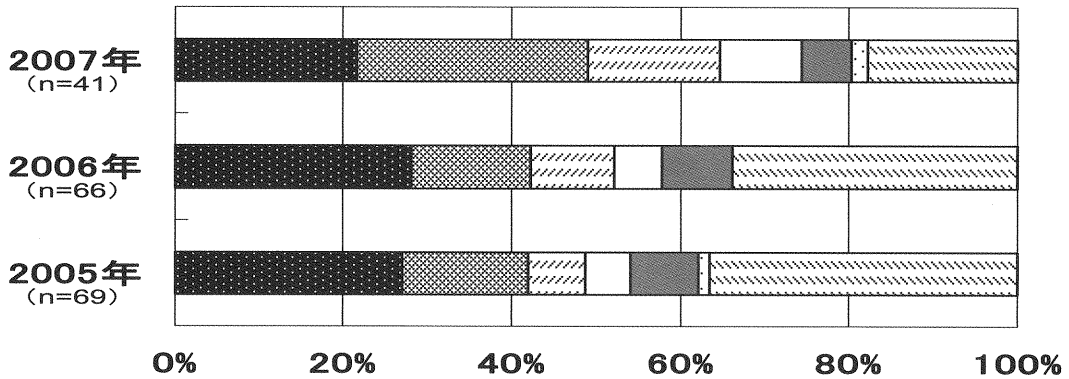


図6. 感染の可能性

■ 絶対ない □ ほとんどない ▨ 五分五分 □ 十分ある ■ わからない

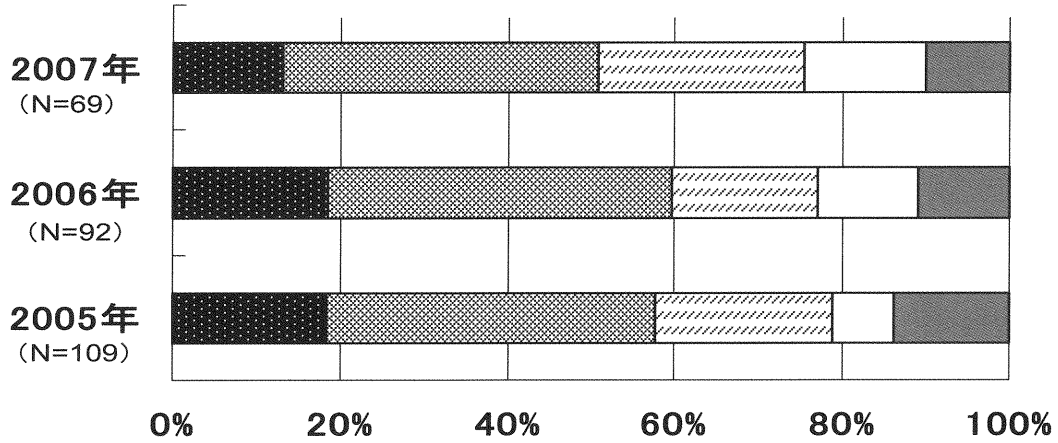
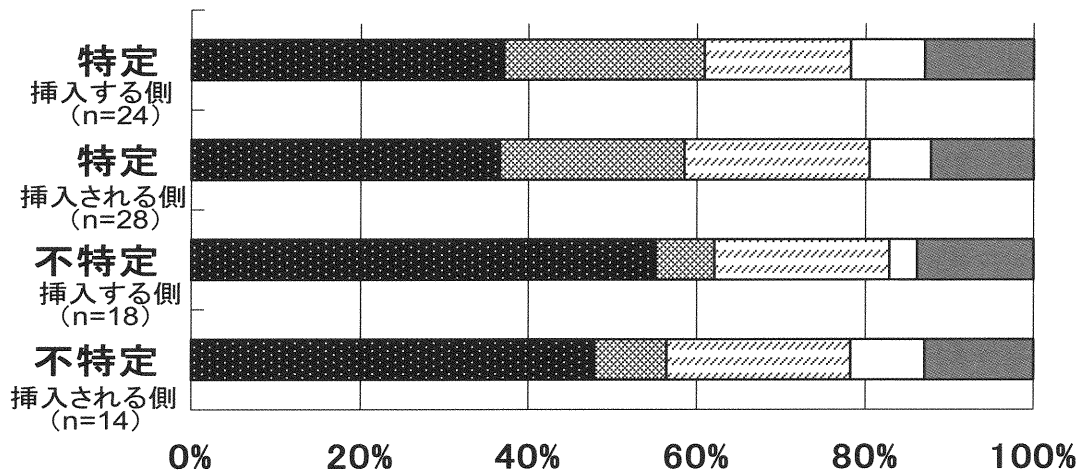


図7. コンドーム使用状況  
～パートナー別、性行為役割別～

■ 必ず使用 □ 多い ▨ 五分五分 □ 少ない ■ 使わない



## 東京地域における同性間の HIV/STI 感染予防啓発の普及促進に関する研究

分担研究者：佐藤未光（Rainbow Ring 代表、ひかりクリニック）

研究協力者：荒木順子、石川毅、江島啓介、木南拓也、河辺宗知、柴田恵、張由紀夫、土田健太郎、福岡丈幸、松永夢暁（Rainbow Ring）、木村博和（横浜市南福祉保健センター）

### 研究要旨

東京地域における男性同性間の HIV/STI 感染予防啓発を目的として、有効な啓発普及方法および体制の検討をおこなった。東京のゲイコミュニティの規模と多様性を考慮し、コミュニティに根ざした予防啓発を推進するために、当事者参加による CBO（Rainbow Ring）との協力体制のもと、予防啓発活動の展開を図り検討した。

- 1) コミュニティセンター「akta」は、コミュニティに見える活動を展開すべく、様々なイベントや展示会、講演会などへの活用を継続した。また、予防啓発活動の拠点としての役割、および情報提供の場としての役割を遂行した。情報誌であるマンスリーakta もその一端を担ってきた。
- 2) 新宿 2 丁目の商業施設へのコンドームアウトリーチをおこなう「デリヘルプロジェクト」を通して、様々な啓発資材の提供をおこなうと同時に、各店舗とのネットワークが構築されてきた。また、アウトリーチ活動は HIV 予防啓発活動をコミュニティ内に可視化する役割もあった。多様なニーズに合わせて開発された様々なコンドームパッケージも、目を引くことでセーフアセックスを意識するきっかけを提供してきた。
- 3) ハッテン場へのアプローチは、当初は施設経営者と顧客に対する意見交換会を開催し、ハッテン場向けの啓発資材を配布したが、2 年目以降はゲイのセックスに絡んだ様々な話題を題材として専門家を講師に迎えておこなう講演会と、ハッテン場へのアウトリーチ「アダルトデリヘル」という形で継続しておこなった。
- 4) ゲイコミュニティへ出たての若いゲイを対象としたワークショップを開催し、各回のテーマに加えて Living Together の要素も取り入れた。
- 5) 東京都や新宿区などと連携して、検査機関や検査イベントのためのポスター・パンフレットの作製や配布、啓発資材の提供を継続しておこなった。
- 6) NPO 法人「ぷれいす東京」との協働で、陽性者との共生を視点に入れた予防啓発を推進する Living Together 計画の一環として、「Living Together Lounge（音楽とリーディングのタベ）」と「Living Together のど自慢」を定期的に開催した。2005 年度にはクラブイベントを対象とした EASY! キャンペーンと、ハッテン場を対象としたバレンタインキャンペーンをおこない、インパクトのあるキャンペーングッズを作製して配布した。2006 年度には東京ゲイ&レズビアンパレードにフロートを出展した。活動の広がりとして、各地域で Living Together パネル展や Lounge が開催され、新宿 2 丁目のクラブ主催でコラボレーションイベントがおこなわれ、東京 FM とのコラボレーション番組やイベントが実現した。
- 7) HIV 感染予防を実践するためのガイドブックとして、感染のメカニズムからセーフアセックスの方法にアプローチをした啓発資材「HAVE A NICE SEX」を開発した。

コミュニティセンター「akta」を予防啓発活動の拠点として、各商業施設、NPO や行政、コミュニティ内で活躍するデザイナーや写真家・モデル・オーガナイザー・DJ などの各分野のキーパーソンとの啓発ネットワークが築かれた。このネットワークを活用して訴求性のある啓発方法や資材が開発され、ゲイコミュニティにアプローチする啓発体制が構築されてきた。そしてその普及方法に一定の成果を得ることができたと考える。今後はこの体制をさらに強化しつつ、ニーズに即した啓発プログラムを開発実践していくと同時に、一方で啓発の届きにくい層へのアプローチ方法についても開拓していく必要がある。

## A. 研究目的

厚生労働省エイズ発生動向における性的接触による HIV 感染者・AIDS 患者報告数はいまだ増加が続いており、男性同性間の性的接触による感染がその過半数を占めている。地域ブロック別では、東京およびその近県での増加に加え、近畿ブロック（大阪）、東海ブロック（愛知）、九州ブロック（福岡）などの都市部での増加が目立ってきている（図 1）。また、市川ら、内海らによると、東京、大阪、名古屋地域で MSM（Men who have sex with men）の HIV 受検者における陽性率は 2～3% であり、梅毒抗体陽性率も一般に比べ高いことから、HIV を含む性感染症（STI）に対する有効な予防対策が必要であることを示唆している。

HIV/AIDS および他の STI が MSM の間で流行してきた背景として、1) これまでの国民向けエイズ対策は MSM に訴求効果を示していない、2) これまでの MSM 向けの啓発資材開発や啓発普及は十分でなく、MSM に対する効果的なエイズ対策がない、3) 保健所等の無料 HIV 抗体検査・相談等の普及および受検者への性感染症予防介入が十分でないこと、があげられる。

わが国の男性同性間の HIV/AIDS 流行防止に有効な対策を構築するには、1) MSM に訴求性の高い啓発資材および有効な普及方法の開発、2) 予防啓発が届きにくい、避けてしまう層に対して予防意識を啓発する資材とその普及方法の開発、3) ハッテン場等の商業施設における Condom 使用を促進する効果的な啓発手法の開発、4) ゲイ・NGO やゲイコミュニティと連携した有効な啓発普及体制の構築、

5) 地域における MSM 対象のエイズ施策を構築する行政-NGO 間の連携推進、6) HIV/STI 検査機会の拡大とセクシュアリティを配慮した受検時の予防介入方法の開発、などを早急に検討する必要があると考える。

当研究は、日本国籍男性の同性間性的接触による HIV/AIDS 報告数が超過半数を占める東京およびその近県地域において（図 2）、MSM を対象とした HIV/STI 感染予防対策を推進すべく、訴求性のある啓発資材および実効的な普及方法の開発を目標としている。東京の MSM への予防啓発をコミュニティベースで取り組むために、当事者参加によるプロジェクトを構築し、コミュニティと連携した予防啓発活動を展開するための方法を模索している。

東京を中心とするゲイコミュニティとしては、新宿 2 丁目を中心とした商業施設（約 300 軒のゲイバー、ゲイショップ、クラブ、ハッテン場など）が集積している地域（以下新宿 2 丁目）が、日本最大規模の地域型コミュニティとして存在している。新宿 2 丁目はゲイ・バイセクシュアル男性が集まり交流する場としての歴史が古く、現在でも一日に数千人のゲイ・バイセクシュアル男性が出入りをしており、週末にはクラブイベントなども開催されるために全国からアクセスがある。ただし近年では、新宿 2 丁目以外にも商業施設が存在するようになり、主に上野・浅草地域、新橋地域、渋谷地域に集積している傾向にある。また、都内には約 90 軒のハッテン場が存在しているが、それらは点在している。メディアとしては主なゲイ雑誌社が都内に存在し



ており、それらに対する効果的なアプローチは東京のみならず全国に波及する可能性がある。しかし一方でインターネットの普及などにより、地域型コミュニティやハッテン場やゲイ雑誌にアクセスせずにゲイ活動をする人も増加してきており、東京地域のゲイコミュニティと言ってもその多様性は拡大しつつある。

HIV/AIDSやSTIに対する認識(知識や情報、予防行動)は、以前から我々が行ってきた調査によると、一般の国民と比較すると高い傾向にあるものの、認識の低い層も高率に存在していた。特に若年層は認識が低い傾向にある。

以上に示したような東京のコミュニティの多様性や、HIV/AIDSやSTIに対する認識の多様性を考慮しながら、効果的な予防啓発を推進するためのプログラムを実施する必要がある。

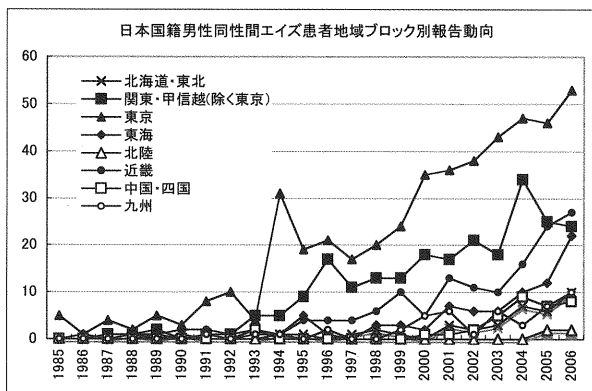
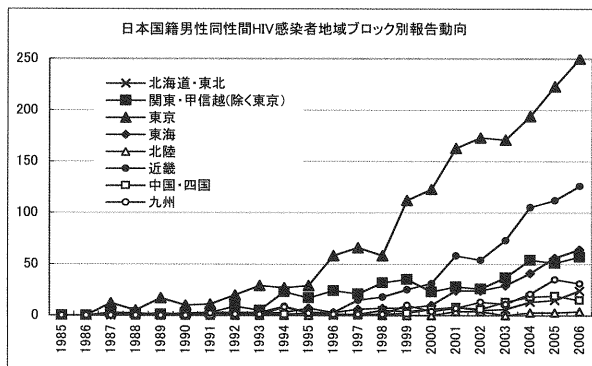
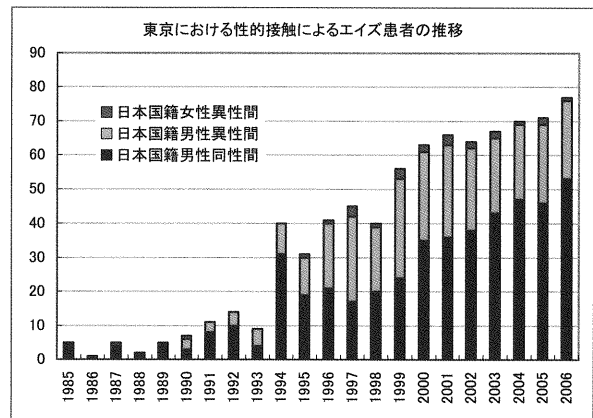
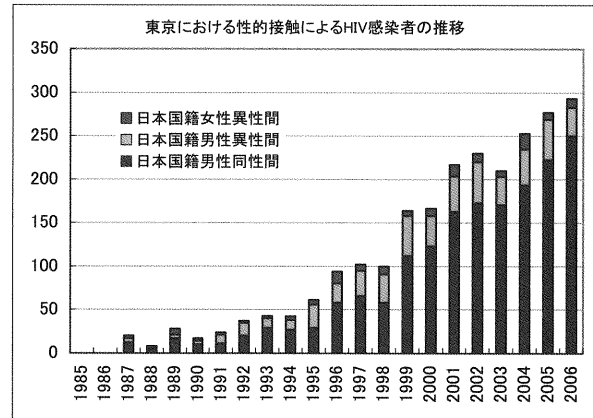


図1

図2

## B. 研究方法

### 1. 研究体制

本研究を始めるにあたり、地域ボランティア、イベント関係者、メディアや商業施設等の従事者などからなる地域ボランティア団体(CBO)として「Rainbow Ring」を結成し、研究協力体制の構築を図った。Rainbow Ringは啓発資材開発およびその普及を行うが、スタッフ各自がもともと有しているネットワークを活用しつつ、既存のゲイNGO、ゲイメディア、ゲイビジネス等の関係者から協力を得るなどによって、予防啓発のためのネットワークを構築している。

Rainbow Ringは予防啓発活動の拠点として、新宿2丁目内にコミュニティセンター「akta」を設立し、運営している。aktaは(財)エイズ予防財団の委託事業として2003年に設立された。

また、本研究で試行する啓発資材、普及方法の有効性についての評価は研究者が担当し、さらに地域でのMSMを対象とするエイズ施策の継続性のために東京および新宿区と、近県の行政との連携を図っている。

東京では、エイズが問題となった当初からゲイNGOが様々な活動を展開してきている。本研究は、今なお増加が続いているMSMにおけるHIV感染に対して、新たにその予防啓発の促進を目標として実施するものである。これまでの既存のゲイNGOの成果を損ねることなく、Rainbow Ringを通じてこれらのNGOと協力連携しつつ予防対策の有り方を検討したい。

## 2. 予防啓発計画

2002-2004年度（第1期）は、東京のMSMへの予防啓発をコミュニティベースで取り組むための当事者参加によるプロジェクトの構築、予防啓発活動の拠点としてのコミュニティセンター「akta」の設立、ハッテン場・バー・クラブイベントなどの商業施設との協力関係の構築、デザイナーや写真家・モデルなどのキーパーソンとの協力関係の構築、行政・医療機関との協力関係の構築、他のNPOとの協働の模索など、予防啓発のための体制作りを中心におこなった。さらにその体制をベースとして、MSMに訴求性のある予防資材・予防啓発プログラムを検討してきた。

2005-2007年度（第2期）は、第1期で構築した体制を拡大・強化しつつ、効果的に活用して、訴求性の高い啓発方法や啓発資材の開発および、コミュニティに効果的に普及するための体制の構築を目的とした。

2005年度（第2期1年目）は、コミュニティセンター「akta」を予防啓発活動の拠点として、各商業施設やメディア、団体や行政、コミュニティ内で活躍するデザイナーや写真家・モデル・オーガナイザー・DJなどの各分野のキーパーソンとの啓発ネットワークを構

築し、その活用を目指した。特にNPO法人「ぶれいす東京」と協働で進める「Living Together計画」（陽性者との共生を視点に入れた予防啓発プロジェクト）を推進し、啓発ネットワークを活用することによる訴求性のある啓発資材の開発とその普及方法を検討した。また、予防啓発活動にボランティアとして参加する若年のMSMのための啓発プログラムについても検討した。

2006年度（第2期2年目）は前年度の活動の継続と充実と拡大を図った。aktaの体制を強化し、各種のワークショップや講習会を開催して多種の層を呼び込む工夫をすることにより、認知の向上を図った。また、アウトリーチは新宿二丁目に加えて、都内のハッテン場にも配布する体制を検討した。行政との連携においては、検査の普及における継続的な協力体制の構築、また啓発イベント等での啓発手法の相談や資材の提供ができる体制作りも検討した。「Living Together計画」も継続し、啓発ネットワークの拡大による活動の広がりを図った。

2007年度（第2期3年目）は前年度までの活動を継続と充実を図りつつ、予防啓発内容および啓発普及体制についての評価を行った。

## 3. 倫理面への配慮

男性同性愛者／両性愛者は、社会からの偏見・差別が強く、啓発活動を進める場合はこれらを配慮する必要がある。このため、本研究では、当事者と連携して調査、啓発等の内容を検討し、対象者を含めゲイコミュニティへの倫理的配慮を保ちつつ研究を進める。コンドーム啓発プログラムをゲイコミュニティに浸透させるためには、バー、クラブ、ハッテン場等の施設の協力が必須で、研究の主旨等を説明し、施設経営者等との相互理解、信頼関係を構築している。

## C. 研究結果

### 1. コミュニティセンター「akta」

コミュニティセンター「akta」は、MSM を対象としたコミュニティベースの予防啓発普及の拠点を目的に 2003 年 8 月設立された。運営はエイズ予防財団の「男性同性間の HIV/STI 感染予防に関する啓発事業」を受託する形で Rainbow Ring がおこなっている。ゲイコミュニティに根ざした予防啓発活動をするために、また無関心層を呼び込むために、アクセスのしやすさを考えてゲイ商業施設等の集中している新宿 2 丁目に設立し、入りやすくくつろぎやすい雰囲気を第一義に考えた。また展示会やミーティング、講演会なども開催できるコミュニティスペースとして運営し、認知の向上と来場者の増加を図った。2006 年度からはスペースを拡大し、事務局員を増員（連日 2 名体制）して、年末年始を除く毎日 16 時から 22 時まで開場している。

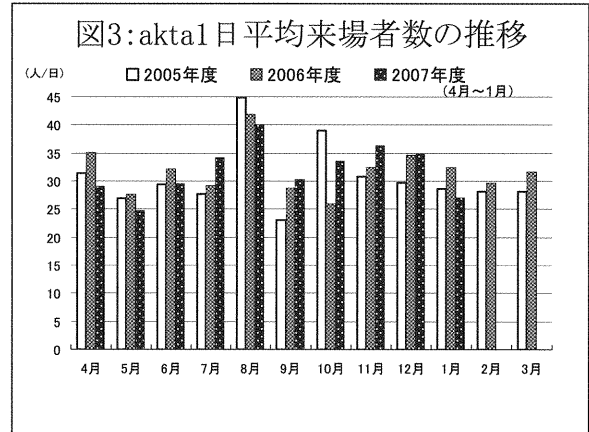
akta は以下の活動をおこなっている。

- ・ 情報提供（予防啓発に関わる情報およびコミュニティ情報）
- ・ リソースの開発・紹介
- ・ 啓発資材配布の拠点（資材の作製・梱包・配送・アウトリーチ等）
- ・ HIV/AIDS に関わる人たちの利用（ミーティングや研修など）
- ・ 学習の場（ワークショップや講演会など）
- ・ コミュニティスペース（ドロップインスペース、展示スペース、打ち合わせやミーティング利用など）

#### 1) 来場者の動向

3 年間の 1 日平均来場者数の推移は図 3 のとおりである。季節では夏～秋に来場者が多く、月ごとの変異では 4 月、8 月、11 月頃にピークがある。初来場者数は月に平均 50 人前後で、毎年ほぼ変わらない（イベント日はカウント困難のため参考値）。初来場者はイベントや展示会の時に増加する傾向も例年どおりで、イベントや展示会が認知を広める効果を

担っていると考えられる。曜日毎の平均来場者数は、月曜日～木曜日は 20 人前後、金曜日は 40 人前後、土曜日は 50 人前後、日曜日は 60～65 人で、週末が多かった。



#### 2) akta の利用状況

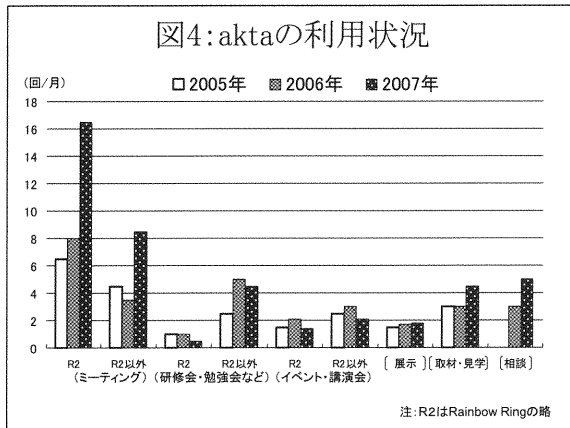
akta はコミュニティセンターとして、展示や展覧会、様々なミーティング、語学教室などの講習会や、一般公開のイベントや講演会などに活用されている。また、事務局員には来場者から様々な相談が持ちかけられることがある（後述）。また、行政や各種団体、学校などからの見学依頼や、メディアなどの取材も受けている。akta の利用状況の推移を

- ・ ミーティング（Rainbow Ring とそれ以外）
- ・ グループによる研修会、勉強会、講習会（Rainbow Ring とそれ以外）
- ・ 一般公開のイベント、講演会
- ・ 展示や展覧会
- ・ 取材、見学
- ・ 相談（2005 年は内容の基準が異なるため比較せず）

の 6 項目に分類すると図 4 のようになる。

例年、月に 1～2 件の展示会をコンスタントに催しており、イベントや講演会もほぼ毎週末に行われて、akta の来場者の増加に寄与している。2007 年度はミーティングの利用が増加した（月平均 25 回、前年比で倍増）。Living Together 計画（後述）に関わるミーティングや、2006 年度から始まった戦略研究に関わるミーティング、行政関係者とのミーティング

などにも利用され、加えて Rainbow Ring 内でも各プロジェクトのミーティングが多くもたれるようになったことが原因と考えられる。また、2007 年度は見学数も増加し、予防啓発拠点のモデルとして認知され始めた結果と考えている。



### 3) 相談

来場者から相談があった場合には原則的に、aktaにある資料やホームページの紹介、相談機関の紹介している。月に2〜6件の相談がある。相談内容として多いのは「HIV 感染症」に関して（主に「検査機関」「感染不安」「医療機関」「知人に感染を告白された」など）で、ついで「セクシュアリティについて」であった。資料については検査や病院、性感染症などの情報を各種団体や行政などから取り寄せ、充実させている。感染不安などについては、専門的なカウンセリングができないことを了解いただいた上、話を傾聴するに留め、その際に誤った知識があった場合は適正な情報を提供するように努めた。2006 年度には相談の対応について、NPO 法人「ふれいす東京」の生島さんを講師にケースカンファレンスをおこなった。

### 4) マンスリーakta

aktaより情報紙「マンスリーakta」を毎月発行している。内容はaktaのスケジュールを中心に、当初は Rainbow Ring の活動報告や検査・医療情報を、コミュニティ情報を掲載していた。表紙にはaktaで展覧会を催したアー

チストによるイラストや写真などを掲載し、アーティストが我々の活動に参加する場所としての役割も担った。2007 年度には紙面を拡大した。まず表紙には様々なタイプのゲイの顔写真を掲載して、いろいろなターゲット層に読まれるように多様性を演出した。内容はaktaのスケジュールや催し物の情報に加え、コミュニティ情報が多くの割合を占め、コミュニティとの連携を強化した。デリヘルなどの各アウトリーチ活動、イベント折り込み、店舗での発送商品への折り込み、保健所や医療機関への発送などを通じて配布している。内容の増加に伴い、編集会議が定期的に行われている。毎月 5,000 部発行している。

### 5) PRHYSM

企画者である DJ ユメと毎回変わるゲスト DJ による音楽を楽しむイベントである。目当ての DJ を求めてイベントに参加するような「クラブ好き」の人達をターゲットに、aktaの認知を広げるために企画された。また、ゲストの DJ にとっても普段クラブに行かないような人達に対して、クラブの楽しさを伝え、自分の音楽への関心を高めてもらうための機会となっている。クラブイベントではDJは重要なキーパーソンであり、クラブイベントへのアプローチをしていく上で、DJ との関係づくりは重要であると考えている。各回 40〜50 人の来場者があった。

## 2. デリヘルプロジェクト

新宿 2 丁目の重要な構成要因であるバーおよびクラブの顧客や従業員を対象とし、コンドームをきっかけとして AIDS/STI やセーフアセックスを身近に意識してもらうことを目的に、コンドームアウトリーチをおこなっている。これはもともと自主的にコンドームを無料配布していた新宿 2 丁目の商業施設による団体「project com.」との協働事業であり、Rainbow Ring が人的提供およびコンドームの作製・提供をしている。

ボランティアスタッフ「デリヘルボーイ」(delivery health boys の略)により、毎週金曜日に新宿2丁目において、コンドームと啓発資材のアウトリーチをおこなっている。デリヘルボーイの募集はチラシやホームページ、マンスリーaktaの紙面上でおこなっている。また、ゲイ雑誌の誌面で活動の紹介していただいたこともあった。アウトリーチの際はおそろいのユニフォームを着用し、若者の興味を引き立てると同時に、街での活動が目にとまる効果もねらっている。

また、コンドームパッケージを季節毎に刷新することが特徴であり、例年12～16種類のコンドームパッケージを作成している。デザインやイラストは、aktaの展示などを通じてコネクションのできたアーティストに依頼したり、様々なターゲット層に見合ったイラストが提供できるようにアーティストを選択している。

配布店舗数は1回あたり140～145軒。例年20軒ぐらいの入れ替わりがある。1回のアウトリーチにつき900～2,000個のコンドームを配布しており、年間で約43,000個を配布している。配布に参加したデリヘルボーイは各回3～10人である。

デリヘル活動が定常的におこなわれるために徐々に認知も向上し、店舗との交渉がスムーズになり、デリヘルボーイによる各店舗からの意見や情報の収集も見られる。デリヘルボーイどうして情報の交換や共有・問題提

起や解決を図るようになってきた。

デリヘルボーイは、毎月数名ずつ新人が入ってきており、また同時に活動に参加しなくなる人もいるため、比較的出入りが激しい。デリヘルボーイとして参加することが、そのスタッフにとっての予防啓発になっていることも予想された。また、アウトリーチをしている際にHIV/STIや予防について、またはRainbow Ringの活動の内容について質問をされることもあり、質問集を作るなど、彼らの中でそれを共有するような工夫をしている。2005年度は月に1回デリヘルスタッフのための勉強会を開催したが(表1)、開催するスタッフの負担が大きかったため、2007年度現在では不定期に交流会を開催して情報の伝達を図っている。毎回のデリヘル活動後にはコアスタッフとともに必ずミーティングを行い、活動中における問題点を交換し発表し合い、コメントを加えている。

2007年度はデリヘル活動の対象である各商業施設に対して、普段のアウトリーチ活動による効果の検討を行った。目的は、コンドームのアウトリーチをおこなうことにより各店舗や顧客、街の意識がどのように変化したのか、を観ることである。手法としては各店舗にインタビュー調査を11月～2月に行い、それを分析した。インタビュー内容の軸は、コンドームアウトリーチへの顧客や従業員の反応、コンドームアウトリーチで現れた変化、aktaの認識、新宿2丁目の街全体の雰囲気

表1. 2005年度 デリヘル勉強会

	日時	テーマ	講師	参加人数
第1回	7月22日	HIV感染症の基礎知識	佐藤	13人
第2回	8月26日	東京都のエイズの現状と対策	飯田	15人
第3回	10月28日	自分の心と向き合う	今井	12人
第4回	11月25日	若い僕らとビョーキ	市川	10人
第5回	1月27日	Living Togetherを考える	張	13人
第6回	2月24日	Remember「新木場ゲイ殺人事件2000」	永易	18人

変化などである。インタビュー風景をビデオ撮影することが可能な店舗は、12月に行われたデリヘルボーイズ展で上映をさせていただいた。アウトリーチをしている146軒中、インタビューに回答を承諾していただいた店舗は78軒(53%)で、そのうちビデオでの撮影を承諾していただいたのは36軒(25%)であった。インタビューの結果では、大半の店舗においてデリヘルに対する従業員や顧客の反応は支持的もしくは好意的であった。特に様々な種類のパッケージが展開されることが、関心や興味を引き出す主因であった。半数以上の店舗で、店舗内や街でのHIVについての意識の高まりを感じていた。

2007年12月には、研究成果発表会としてデリヘルボーイズ展(上記のインタビュービデオを放映すると共に、今までに作成した Condom パッケージを展示)と、アウトリーチされている店舗経営者やデリヘルボーイを交えてシンポジウムを開催した。シンポジウムではアウトリーチ活動の意義や苦勞、感想などについて、それぞれの立場から意見の交換がなされた。

### 3. ハッテン場プロジェクト

2005年度はハッテン場顧客へ直接アプローチするための資料「Fucks!」を作製して配布した。また、ハッテン場顧客と経営者の両者が参加できるカフェイベント「Fucks! café」を開催した。また、ハッテン場経営者の興味を引くテーマとして「ゲイビジネスとセーファーセックス」を題材に講習会を開催した。2-3月には「バレンタインキャンペーン」として、東京近郊のハッテン場90店舗のうち協力依頼をして了解を得られた66店舗に対して、「EASY!〜Living Together is Easy」のコンセプト(後述)を取り入れたポスターの掲示(2月14日前後)と、ポストカードブックの配布(3月14日前後)を実施した。協力いただいた店舗はキャンペーンのWEBサイ

トで紹介した。キャンペーンの宣伝は、ゲイ雑誌やインターネット、イベントのフライヤー上でおこなった。

2006および2007年度は、前年度にオーナーや関係者を対象とした講習会やイベントを開催したが参加者が少なかったため、その形態の講習会は継続しつつ(後述)、アウトリーチ(Rainbow Ringのイベントのフライヤー、マンスリーakta、その他の啓発資料など)を中心に展開した。配布方法は、新宿近郊のハッテン場(約35軒)はデリヘルのアウトリーチと同時におこなった。また、上野・浅草-東京・新橋の都心のハッテン場(約16軒)はレンタカーでアウトリーチをおこなった。それ以外の遠方のハッテン場(約16軒)には郵送した。それぞれ、月に1回のペースで配布をおこなった。定期的なアウトリーチは、運営サイドにRainbow Ringの活動を認知・記憶してもらう効果があった。

### 4. ゴツスタ(2006、2007年度)

若年層のゲイや、ゲイコミュニティにアクセスし始めたばかりの初心者を対象として、ワークショップを開催した。2006年度は集客を図るために、初心者ゲイのサークル活動(GO2' n=2丁目に行こうの意味)と、HIV/STIやセーファーセックスに関するワークショップ(ゴツスタ=GO2' n study)を隔月で開催し、2007年度はゴツスタのみを隔月で開催した。参加者はチラシ、mixiなどで募った。毎回アイスブレイキングを入れたり、参加者が発言しやすくなるよう工夫をしている。また2006年9月からは毎回、HIV感染者やその周りの友人、家族、恋人などが書いた手記を朗読し、その後意見交換をすることで、HIV感染者と既に一緒に生きているのだということ伝える時間を設けた。プログラム終了後は、セックスやセクシャリティの悩みなどを気軽に相談できる時間を提供した。開催日、参加者数、内容は以下の通りである。

- ・2006年5月27日「初めての〇〇」参加者数：19名（スタッフ4名、新規15名）  
 “初めての〇〇”と題して、〇〇をゲイ、セックス、彼氏、2丁目などと置き換え、幅広く話し合いながら、お互いのセックスについて気軽に話し合えるように進化した。また「初めての性感染症」の経験談集を使い、淋病や尖圭コンジロームなど体験者のエピソードを織り交ぜながら紹介した。
- ・2006年7月22日「夜は〇〇、おもいっきりトーク」参加者数：25名（スタッフ5名、新規6名、リピーター14名）  
 アダルトグッズやサプリメントを紹介しながらHIV/AIDSの感染経路について触れ、自分で考えるセーフターセックスを紹介した。また相手がナマで求めてきたときの対処法などについて考えた。
- ・2006年9月30日「Reality〜It's your reality〜」参加者数：24名（スタッフ5名、新規4名、リピーター15名）  
 HIV/AIDSについて遠くの存在だと思っている人は多く、今回は少しでもその距離感を縮めるために企画された。この回からLiving Togetherの手記の朗読も始めた。
- ・2006年11月25日「〜Living Together〜」参加者数：28名（スタッフ5名、新規9名、リピーター14名）  
 世界エイズデー直前でもあったので、HIV/AIDSに焦点を絞った。PLuS+で使用したスライドショー、他団体が制作した検査に関する映像をお借りして上映した。
- ・2007年1月27日「昇れ！2007年のH運！（ポポン）」参加者数：24名（スタッフ4名、新規3名、リピーター17名）  
 様々なセックスの場面を想定して、よりセーフターなセックスを行う方法を考え、意見交換を行った。
- ・2007年5月26日「HIV検査について」参加者数：22名（スタッフ4名、新規10名、リピーター8名）  
 まずHIV抗体検査情報を提供した。その後、検査を受けたことがある人にはその動機、また受けたことがない人にはその理由を聞いた。そして、検査に行かない人はどうしたら行くことができるのかを話し合った。
- ・2007年7月28日「HIVはどうして増えているの？」参加者数：24名（スタッフ5名、新規5名、リピーター14名）  
 まず参加者にHIV感染動向を提示した。その後、男性同性間でHIV感染がなぜ増え続けているのかについて考えた。また参加者自身の性行動について振り返ってもらった。
- ・2007年9月29日「セーフターセックスとコンドーム」参加者数：12名（スタッフ5名、新規3名、リピーター4名）  
 HIV/AIDSの基礎知識として病気の説明と感染経路などを解説した。その後、セーフターセックスの象徴としてコンドームを紹介し、様々な種類があることを実物に触れてもらいながら示し、コンドームを身近に感じてもらうように心がけた。
- ・2007年11月24日「HIV〜感染したらどうなるの？」参加者数：27名（スタッフ5名、新規9名、リピーター13名）  
 まずHIV感染したらどうなるのか、具体的に感染告知後から通院開始までのこと、社会的な保障はどのようなものがあるのか、投薬や治療など、HIV感染者およびHIV感染者のケアをしている専門家から取材した情報をもとに提供をした。その後、万が一友達にHIV感染を告知する、または告知された場面を想定し、どのような対応が良いのかを考えた。
- ・2008年1月26日「自分なりのセーフターセックスガイドラインを考えよう」参加者数：13名（スタッフ3名、新規4名、リピーター6名）  
 セーフター、アンセーフターな性行為をそれぞれ考えてもらうために、自分自身の性行動をあげてもらい、参加者で意見交換を

した。その後、自らのセーファーセックスの基準がその時の対象者ごとにゆれることを確認し、セーファーセックスの基準を再確認した。

レクリエーションの G02' n がなくなった 2007 年度は若干参加者が減ったようだが、新規の参加者数は 2006 年度と変わらないことがわかった。2007 年度では事前事後にアンケートをおこない、伝えたい情報が伝わったかどうか評価をしたところ、良好な結果を得られていた。

## 5. ACADEMIA (2006、2007 年度)

2005 年度におこなったハッテン場経営者向けの講習会は、内容が一般のゲイも十分に聞きたい内容であること、ハッテン場の経営者だけに呼びかけても参加が得られない（かえって参加しづらい）ことから、2006 年度からは対象を一般のゲイとして開催した。ゲイのセックスに関わる様々な話題をテーマに、その方面を専門としている講師を招いて講演会を開催した。参加者はポスター、チラシ、mixi で募った。開催日、参加者、内容は以下の通りである。

- ・2006 年 4 月 16 日 参加者 20 名  
テーマ：ゲイの抑うつ傾向とリスクな SEX の関係、セックスに依存的になってしまうことの関係について  
講師：京都大学医科学研究科 日高庸晴先生  
内容：ゲイの人は、ヘテロセクシャルの人に比べて精神的な健康状態が悪い傾向にあり、精神的に不安定な状態にある場合、リスクなセックスをしやすい傾向にある
- ・2006 年 5 月 21 日 参加者 30 名  
テーマ：セックス依存傾向と関係した心の病気についての解説と予防法、処方箋について  
講師：林義拓先生（国立精神・神経センター、精神科医）

内容：うつ病に関する一般知識、うつ病と抑うつ状態の違い

- ・2006 年 7 月 8 日 参加者 13 名  
テーマ：HIV と福祉（HIV やうつになった際の障害者福祉や生活保護等行政が用意している福祉政策について）  
講師：前田くにひろ先生（文京区議会議員）  
内容：文京区での障害者支援について、生活保護で受けられるサービスについて
- ・2006 年 9 月 18 日 参加者 14 名  
テーマ：HIV 診療について  
講師：根岸昌功先生（医師・都立駒込病院）  
内容：HIV/AIDS 診療の歴史
- ・2007 年 3 月 18 日  
テーマ：あなたの知らない射精の世界  
講師：奥村俊子先生（医師・済生会川口総合病院）  
内容：射精のメカニズムについて医学的に解説
- ・2007 年 12 月 8 日 参加者 18 名  
テーマ：ゲイのメンタルヘルスとセックスとの関係について  
講師：京都大学医科学研究科 日高庸晴先生  
内容：ゲイの人たち特有のメンタルヘルスの様々な問題について。また、そのメンタルヘルスの状態とセックスのときの行動がどのように関係するのか、大規模インターネットアンケート調査の分析から見えてくる様々なデータを紹介していただいた。  
各回とも非常に充実した内容の講習会であり、参加者は比較的関心を強く持った人が集まる傾向にあった。直接の予防啓発を期待するというよりも、より充実したゲイライフを目的にすることで、HIV/STI の予防に波及する効果があると考えられる。また講師とのコネクション形成を担っていると考えられる。

## 6. 医療・検査・行政との連携と情報提供

医療・検査機関、行政と協働して行ったも



のは以下の通りである。

1) S/H Vol.5 の発行 (2005 年度)

S/H は MSM のセクシュアルヘルスの向上を目的に、医療や検査などに関する情報を提供するフライヤーである。第 5 号は例年おこなっているアンケート調査の中の、HIV/STI の知識を問う質問の解答を掲載した。

2) マンスリーakta 掲載の HIV/STI 診療従事者等へのインタビュー

HIV/STI の診療に携わっている様々な職種の人 (2005 年度、2006 年度はドクター) にインタビューを実施して、マンスリーakta に掲載している。仕事の中でゲイと接触することをどのように感じているかなどインタビューし、診療・検査・カウンセリング等がゲイにとって敷居の高いものではないことを示し、それらを受ける上での参考にしていただくことを目的とした。また、インタビューに応じていただいた方々に対しては、Rainbow Ring の活動を示し、コネクションを形成した。

3) Living Together Lounge (後述)

Living Together 計画の一環として昨年度から行っているイベントである。東京都の委託事業として開催した。

4) ACADEMIA (前述)

東京都の委託事業として開催した。

5) 各保険所および南新宿検査相談室の広報

新宿保健所のゲイのための検査イベント、横浜市エイズ臨時検査、東京都保健所マップ、南新宿検査相談室について、チラシやポスターの作成および配布を委託された。Rainbow Ring と連携のできているデザイナー・イラストレーターと協働で作製した。必要に応じて文面やキャッチコピーも提案した。Rainbow Ring のアウトリーチ活動を通じて配布をおこなった。

6) 各地域での「Living Together」パネル展示

Living Together 計画 (後述) にご協力をいただいている各写真家が撮り下ろした写真

とテキストを展示した。Rainbow Ring はポスターとチラシをデザインした。

・横浜市西区保健所主催「Living Together」展 (2005 年度)

・仙台市主催 EASY!-Living Together is EASY!-写真展および Living Together Lounge (2006 年度)

・愛知県主催 EASY! パネル展 (2006 年度)

7. 冊子「HAVE A NICE SEX」(セーファーセックスガイドブック)

2005 年度の EASY! キャンペーン (後述) において作製した「セーファーセックスガイド」を進化させ、小冊子を作成した。内容は、HIV に感染するリスクを低減する方法を、感染のメカニズムから考えるもので、陽性者・非陽性者に関わらず利用できるように配慮している。巻末には関東圏の検査や相談、サポート団体等のリソースを掲載した。アウトリーチ活動を通じて各店舗と、保健所や医療機関などに配布した。

8. Living Together 計画

陽性者との共生をテーマに、NPO 法人「ぶれいす東京」が始め、2004 年度から Rainbow Ring と協働で進めているプロジェクトである。HIV に対する無関心は、陽性者が身近に存在することについてリアリティがないことに起因する。また予防とは、陽性者を排除することではなく、誰もが一緒に生きているからこそ誰にでも必要なものである。それらのことについての気づきを、陽性者やその周囲の人が綴った手記などを通じて与えるプロジェクトである。

1) Living Together Lounge (音楽とリーディングの夕べ)

クラブイベント会場 (Arch) ・ミュージシャン・朗読出演者とのコラボレーションで実現している (毎月第一日曜日開催)。陽性者やその周囲の人が綴った手記をゲイ著名人や様々

な職種・立場の人々が朗読し、その手記を朗読した理由や感想についてコメントをいただく。その合間でライブミュージックおよびDJの選曲・アレンジした音楽を楽しむイベントである。ミュージシャンからも自分自身とHIV等の関わりについてのコメントをいただいたり、朗読をしていただいたり、場の雰囲気にあった演出を心がけていただいている。毎回40〜120人の参加があった。2007年度には参加者にアンケートを行い、Rainbow Ringやaktaの認知や感想を聞いている。それによると毎回アーティスト毎に参加者が変わっており、アーティストが新規の参加者を引きつけていることがわかった。

## 2) Living Together のど自慢 (2006年度、2007年度)

Living Together Lounge がプロや人気のあるミュージシャン・アーティストの音楽を楽しむイベントであるのに対して、素人がカラオケを楽しみながら、手記の朗読とそれに対するコメントを述べていくイベントである。新宿2丁目のバー「九州男」で6回開催した。毎回12〜14人の方に出演をいただき、40〜50人の参加があった。

希望があれば誰でも参加できる参加型イベントであることと、以前よりHIV啓発活動に場所の提供等のご協力をいただいている「九州男」での開催という点からも、重要なプログラムである。

## 3) EASY! キャンペーン (2005年度)

Rainbow Ring は2004年度まで、12月1日の世界エイズデー前後にセーフターセックスキャンペーンを展開し、ゲイおよびゲイミックのイベントにてキャンペーングッズを配布してきた。これは主にクラブイベントで遊ぶことが好きな層をターゲットに、コンドームと一緒に予防啓発メッセージを届けることを目的にしてきた。2005年度は「Living Together 計画」の一環としてキャンペーンを行い、世界エイズデーの後1ヶ月間(12月2

日-12月30日)に、都内で開催されたゲイおよびゲイミックイベントにおいて、キャンペーングッズ(写真集・コンドームとポストカードとセーフターセックスガイドのセットの二種類)を配布した。

キャンペーンのコンセプトは「EASY!〜Living Together is Easy」とした。これは陽性者との共生が決して困難ではない(EASY)ことや、誰にとっても生きていくことや健康であることは大切で、それをあえて「EASY!」と言うことで一緒に克服していこう、という想いを集約したものである。キャンペーンの内容は以下の通りである。

- ・大版の写真集を作製した。内容は、日常生活やセックスや恋愛における20のテーマについて、HIV感染という体験から考えたことを様々な人(陽性者・非陽性者にかかわらず)に綴ってもらった文章を掲載した。文章の募集や選択、編集は「ふれいす東京」と協働しておこなった。写真はaktaで写真展をしていただいた写真家に依頼して撮影し、いままで築いたネットワークを活用して、モデルやデザイン、翻訳を依頼して作製した。
- ・セーフターセックスガイドを作成した。これはHIVに感染するリスクを低減する方法を、感染のメカニズムから考える内容のもので、陽性者・非陽性者に関わらず利用できるように配慮した。また、ゲイを対象としたHIV/STIの電話相談をおこなっている機関に依頼し、電話相談の紹介を掲載した。
- ・キャンペーンの告知は事前に、ゲイ雑誌やインターネット(WEB、バナー広告、コミュニティサイト、ネットニュース)などのメディアや、イベントのフライヤー上でおこなった。
- ・コンドームとポストカードとセーフターセックスガイドのセットは折り込みにしたが、写真集は各イベントにスタッフ(EASY! BOYS)を派遣し、全て手配りで配布した。

・キャンペーン後に、キャンペーングッズや EASY! BOYS の着用していたデザインの T シャツは、WEB 上でも手にはいるよう募集し、キャンペーンの反響を見た。

38 のイベントで、5105 個のコンドームセットと 2785 冊の写真集を配布した。また、デリヘルプロジェクトを介して新宿 2 丁目の 146 の商業施設にも配布し、90 のハッテン場にも 10 部ずつ配送した。

EASY! キャンペーンで配布した、ブックレット、ポストカードブック（ハッテン場プロジェクトの項で前述）の配布は、2006 年度以降も継続しておこなった。特にブックレットについては希望の問い合わせもあったため、増刷をして、希望したゲイバー、ハッテン場などに常備するように配布をした。

ポストカードブックのために撮り下ろした写真（写真：竹之内祐幸）は、大阪、仙台で展示会をおこなった。

また、ポストカードブックに掲載された写真・文章に、ヘテロセクシュアルを対象とした写真・文章も加えてパネルを作製し、愛知の金山駅でエイズキャンペーンの展示をした（医療・検査・行政との連携と情報提供の項で前述）。この文章の特徴としては、HIV やセーファーセックスそのものがテーマではなく、人生や生活、日常の中の一部としてとりあげられている。現代社会の中で見失いがちな、生きていることのかげがえのなさに気づいたり、相手を思いやったりする気持ちの中から、HIV の予防について意識を高める手法は、ゲイに限らず一般社会にも有効な手段であろう。

#### 4) 東京ゲイ&レズビアンパレード 2006 でのフロートの出展（2006 年度）

8 月 26 日の東京ゲイ&レズビアンパレード 2006 において、Community Action for AIDS 2006 フロートとして出展した。パレードの中、唯一の HIV 関係のフロートであった。白地の垂れ幕にピンクの文字で「HIV を持っている人も、そうじゃない人も。僕らはもう、いつ

しよに生きている。WE' RE ALREADY LIVING TOGETHER」と大きく綴ったシンプルなフロートであったが、メッセージ性があり、音楽も含めて好評であった。

#### 5) コラボレーション

LT 計画では、そのコンセプトに賛同して何かを一緒に企画したいと考える人々とコラボレーションして、各所各地に活動を広げようと考えている。医療・検査・行政との連携と情報提供の項で述べたもの以外に、下記のコラボレーションがあった。

##### ・I have a Dream（2007 年度）

新宿二丁目のクラブ「ArcH」の店長の提案で企画した。クラブユーザーや友人にドラッグ使用者や新規の感染者が多いことから、予防啓発をテーマにしたクラブイベントを開催したいとのことであった。DJ や VJ の協力のもと、8 月 4 日に開催。VJ の流す映像や装飾の中に LT のメッセージを挿入した。

##### ・TOKYO FM との協働（2007 年度）

LT 計画に共感した番組スタッフの提案で、コラボレーション番組およびイベントを実施した。12/3～6 に放送した「EXTERMAX」という番組で、ゲストが手記を朗読した。また 12/14 には TOKYO FM ホールにて「TREE OF LOVE ～Think about AIDS」というイベントが開催され、番組のパーソナリティやゲストによる手記の朗読、キースヘリング作品展、ライブなどが行われた。

#### 6) ホームページ

<http://www.living-together.net/>

イベントに参加できない人や、インターネットのみでアクセスしてくる人も、LT 計画に接することができるように、ホームページを作成した。LT 計画のコンセプト、コラボレーションによる活動の広がり、陽性者やその周囲の人たちによる手記、今までの活動の紹介、製作したポスターや冊子の紹介、セーファーセックスガイド（前述）などが閲覧できる。

また、LT 計画がより広がりを持つように、資材の活用の仕方や活動に参加する方法も提示している。

#### D. 考察

2004 年度までに構築してきた akta を中心としてきた予防啓発体制は、多様性のあるコミュニティの中にかにネットワークを形成するかの試行錯誤の連続であった。この3年間も試行錯誤の連続であったが、認知の高まりと同時にいくつかの体制（プログラム）は定着し、コミュニティに浸透して効果をあげていると考えられた。しかしそれを安定して維持するためには akta の機能の充実させる必要があり、人員を確保することが必要である。最終年度ではこれまでの活動の効果（特に akta とデリヘル）についての評価を検討した。

##### 1) コミュニティセンター「akta」の意義と効果、および展望について

akta には安定した数の来場者があり、新規来場者数もほぼ連日数人ずつ見られる。イベントや展示会、講演会などにもコンスタントに活用され、コミュニティセンターとしての機能が定着してきたと考える。またミーティングの件数が増加してきたことは、Rainbow Ring 内で例年よりも多くの企画が実施されたことに加え、Living Together 計画や戦略研究などの他団体も含めた活動の広がりをも反映しており、akta は東京の予防施策を計画・実行していく上で、重要な拠点になっていると考えられる。相談件数や取材・見学も増加傾向にあり、情報提供の場としてのニーズや、予防啓発拠点のモデルとしての役割のニーズも高まりつつある。今後も akta はこれらの三つの役割（存在することでコミュニティに HIV の問題を顕在化する、予防啓発活動の拠点、予防啓発情報の提供）をバランス良く果たしていくことが必要である。一方で事務局はますます多忙になっており、akta を運

営する上で、安定した人材の確保・育成が求められる。

##### 2) 新宿 2 丁目へのアウトリーチ活動の意義と効果、および展望について

デリヘルインタビューを実施してわかったことは、多くの店舗がデリヘルプロジェクトについて理解を示し、支持をしているということである。それは普段のデリヘル活動中の反応で何となく感じられていたことであるが、2007 年 6 月におこなったコンドームパッケージの人気投票においても全ての店舗に快く応じていただいたこと、および、2007 年に実施したインタビューにも半数以上の店舗の協力を得ることができ、各店舗に 30 分以上もの時間を割いていただいたことで実感できた。インタビューの内容からも分析できるが、アウトリーチを行うことで HIV の予防啓発活動が街の中にあることを示し、コンドームの存在が予防の必要性を示すアイコンとなっていることがわかる。インタビューに答えていただいた方の大多数が何らかの形で HIV の問題に接したことがあり、予防啓発活動がコミュニティの中に必要であると感じている。一方で、我々が期待していた「コンドームがあることで、HIV やセーフセックスの話題が出る」という効果は、ほとんど見られないようであった。日常会話の中で、HIV やセーフセックスについて語られるということは困難であると思われる。今後の課題としては、アウトリーチ活動を続けることで各店舗の小コミュニティとのネットワークをさらに強固にし、必要時に我々の活動にアクセスできるような道筋を形成することと、それをサポートするような商業施設向けの資材を開発することを考えている。また、アウトリーチ活動が今後も継続していけるためのスタッフの確保と育成が必要である。

##### 3) ハッテン場へのアプローチについて

ハッテン場というセックスがおこなわれる